

そうだ コンクール、応募しよう。

〜国語科教員の心理的負担を軽減するWEB応募のすゝめ〜

関西大学第一中学校・高等学校 秋吉 和紀

とかくに、コンクール応募はやりにくい

コンクール応募の準備をしながら、こう考えた。創作課題を出せばチェックに忙殺される。応募の準備をすれば作品数を数えることになる。未提出者を見つければ提出するように促さなければならぬ。とかくに、コンクール応募はやりにくい。

国語科の教員として働き始めて間もない頃、漱石「草枕」の冒頭に倣ってそのように考えたことがある。授業者も授業づくりに手間暇かけ、学習者も創作に腕を振るい、ようやく完成した成果物。せっかくならコンクールに応募させたいと授業者なら誰しも思うが、そこで壁になるのはそうした「応募に係る労力」である。何も楽をしようと思っただけのように言っているのではない。学校運営の上で必要最小限と思われる業務に、持てる最大限の力を日々注ぐ学校教員にとつては、そうした「少しの労力」が心のブレーキを踏む要因となってしまうのである。

コンクール応募を後押しする最近の状況

そうは言うものの、昨今の現場を取り巻く状況は、コンクール応募を後押しするようなものとなっている。

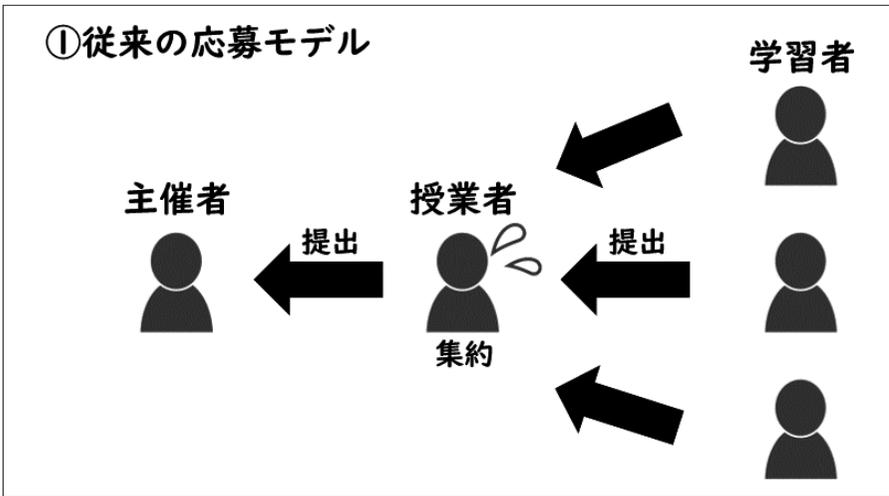
第一に、総合型選抜の広がりである。大学に提出するポートフォリオや活動報告書には、受賞歴などの主体的な学びを評価してもらえような成果をできるだけ記載できた方が良いのと言うまでもない。コンクール応募の機会を増やすことは、学習者の進路選択を考える上でもマインラスではない。そうしたコンクールの中には、金沢大学が主催する「超然文学賞」(*)のように、入賞者が特別入試制度の出願資格を得られるという特色あるコンクールもある。

第二に、令和四年度より『高等学校学習指導要領』(平成三〇年告示)に基づく教育課程がスタートしたことである。ここでは、国語科における変化の一つとして、各領域の標準時間数設定がなされたことを挙げておこう。高等学校国語科の現場の実践がこれまで「読むこと」に大きな比重を置いてきたことから、特に「書く

こと」の時間数設定については現場の教員の大きな関心を集めている。必修科目で言うところの「現代の国語」では「30〜40時間」、「言語文化」では「5〜10時間」というかたちでそれぞれ時間数が設定されている。

第三に、PISAをはじめとしたタブレット端末が教材として学校現場に導入されたことである。一見「書くこと」と直接的には関係ないようにも思えるが、タブレット端末の「簡便に調べられる」、「手軽に情報共有ができる」、「効率的に文書の編集ができる」という機能は、「書くこと」の授業の可能性を飛躍的に広げている。コンクール応募は、学習者の進路選択の可能性を広げるもので、授業で取り組んだ創作物の有効活用ができるものでもあり、また、創作するための最適ツールを学習者は所持している。ここまで環境が揃っていると、コンクールに応募しない手はない。ならば、JR東海の観光広告の「そうだ 京都、行こう。」というキャッチコピーよろしく、現場の教員が心理的負担を感じずに気軽にコンクールに応募できるように

状況を作ることが、教員のために、そして何よりも生徒たちのために良いのである。加えて、多少実益的なことを言えば、コンクールの入賞者が増えれば、学校の宣伝にもなるだろう。



コンクール応募の煩雑さ

では、WEB応募には、どのようなメリットがあるのか。それを考えるために、まず図①をご覧ください。

図①は従来の応募までの過程を簡略化したものである。紙面で提出することの煩雑さは、まず生徒の「字のチェック」にある。どんなに良い作品であっても、書かれた字が乱雑だとそれだけで選考の対象外となってしまう。そのチェックと書き直しは多少なりとも手間のかかるものだ。

また、作品数のチェックも授業者の手を煩わせる作業の一つである。多くのコンクールでは、学校で集約して応募する場合、「生徒の人数」と「延べ作品数」を学校応募用シートに記載するかたちになっている。一人あたりに複数の応募が認められているコンクールでは、延べ作品数を数えるのに時間をとられてしまう。そうした教員の作業が積極的なコンクール応募のボトルネックとなる可能性があるのだ。

WEB応募のすゝめ

上記の応募の煩雑さをいくらか解消してくれるのが、WEB応募である。まず、応募がデータ入力もしくはデータ添付となるので、字の乱雑さをチェックする必要がない。また、多くのWEB応募のコンクールは応募者自身が自分で応募するかたちとなるので、教員自身が集約す

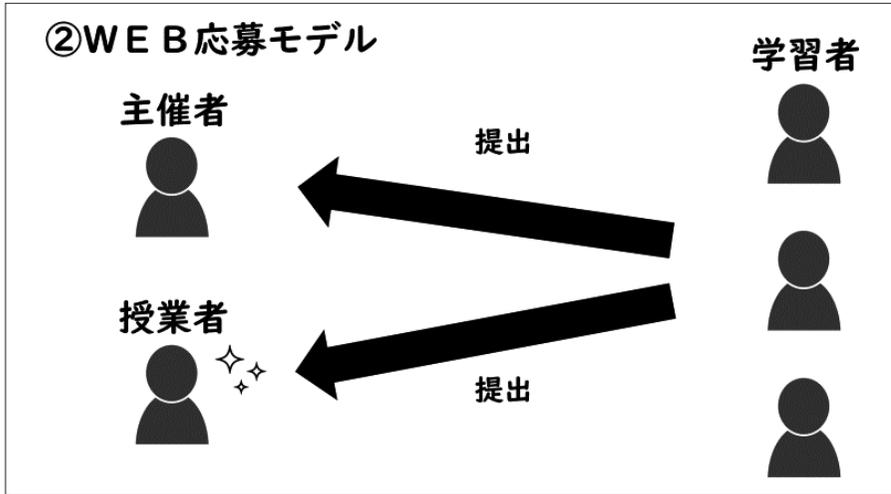
る必要がないのである。

「大会に直接応募するとなると、教員が生徒の作品を把握できないのでは」と疑問を持たれる先生方もいらっしゃるだろう。自身は「短歌」や「俳句」などの短いテキストの場合は、大会に応募させる前に「Google フォーム」や「Microsoft Forms」などのアンケート機能を用いて事前に作品を提出させている。また長いテキストの場合は、「Microsoft Teams」の課題配信機能を用いて、テキストデータを提出させている。そうすることで学習者の提出状況や作品の内容を把握している。こうした機能を用いることにより、誰が提出していないかも一目で確認でき、作品も一覽でチェックや管理ができるので、通常、紙面で行っていたチェックより効率的に作業が行えている。

学習者から見れば、提出先が「主催者」と「授業者」の二箇所に提出することになるが、同じテキストデータを二箇所に送るだけなので、学習者にもそれほど大きな負担になることはない。図②はこうした流れを簡略化したものである。

これは蛇足だが、WEB応募は「郵送費」がからないというメリットもある。紙面で応募する場合、学年単位や学校単位で応募すると紙面がかさばるため、一回の送料が予想外にかかることがある。コンクールに積極的に応募する場合、それが積み重なり、年間でかなりの送

料になる。WEB応募は「郵送費」がかからないため、事務や経理の顔色をうかがう必要はない。



広がりを見せるWEB応募

ところで、実態として高校生がWEB応募できるコンクールはどれほどあるのだろうか。全国で行われている大会やコンクールを網羅的に調べられたわけではないが、二〇二一年度に稿者の勤務校に案内が届いたものや私自身が調べたものを合計した百三のコンクールや大会のうち、およそ四分の一にあたる二十五のコンクールで「WEB応募併用」、もしくは「WEB応募のみ」という形態をとっていた。もちろんまだ限られた数ではあるが、数年前と比べるとWEB応募は広がりを見せつつある。

思わぬ副産物

実際にWEB応募によるコンクールに参加してみたことよって、当初は予想もしていなかった副産物が得られた。一つは「テキストデータ」で提出させることにより、生徒の創作をまとめた「優秀作品集」が今までに比べて格段に作りやすくなったことである。学年の仲間の優秀作品を全体に還元することは、それぞれの学習者の学びにとって意義のあることである。

また、WEB応募による副産物は学習者の側にもあった。それは、タブレット内のメモ機能のアプリに、今まで詠んだ俳句や短歌をデータとして残していたことである。言わば、メモ機能を「俳句手帳」や「短歌手帳」として駆使していたのである。なかには、そのメモに季語検

索サイトのURLを貼付していたり、次に俳句を詠む際の季語の候補などを書き留めていたり、はたまた自分の気に入った俳人や歌人の秀句・秀歌をアンソロジーのようにストックしたりする強者まで現れた。WEB応募を繰り返すことにより、彼女ら／彼らに創作物をデータ管理する意識が芽生えていたのである。学習者は、授業者の教授の意図をいつでも容易に飛び越えて学んでいく。そのような「藍より青し」を垣間見た瞬間であった。

わたしのオススメのコンクール

ここで、WEB応募ができるコンクールで、稿者が注目しているものを三つ紹介したい。私自身がコンクールを選ぶ点で重視しているのは、まず、過去作品を複数年にわたって確認できることである。あまり創作経験のない学習者にとっては、教科書に載るような「傑作」だと実力があまりにもかけ離れていて、お手本にしにくいことがある。一般の高校生や大人が素朴に創作したものを参照した方が、学習者は着想を得やすいようだ。

加えて、「学校賞」があることも重視している。創作はあくまで「個人戦」だが、教室で「団体戦」の雰囲気醸成すると、にわかに教室全体の創作意欲も増すものである。以上に示したように、過去の作品の閲覧、学校賞という観点から、コンクールを紹介する。

(その1) 全国高校生川柳コンクール

福岡大学が主催する川柳のコンクールである。二〇二二年で第十八回を数える。毎年、大会HPの意匠にこだわっており、目でも楽しませてくれるコンクールだ。「川柳」とあつて、入賞作から高校生が世相をどのように捉えているのかをうかがうことができる。ちなみに、二〇二二年度、本校はこの大会で「学校賞」を獲得した。

(その2) 下田歌子賞

恵那市先人顕彰事業「下田歌子賞」実行委員会、学校法人実践女子学園、岐阜県恵那市、恵那市教育委員会が主催者に名を連ねるコンクールである。二〇二二年で第二十回を数える。「エッセイの部」と「短歌の部」の二部門があるが、いずれも「学校賞」を設定している。(ちなみに、他のコンクールでもエッセイをWEB応募できる大会はあるが、「学校賞」を設定しているコンクールは数少ない。)一般部門もあるため、学習者と一緒に授業者自身も応募できるのが、この大会のもう一つの魅力である。

(その3) あなたを想う恋のうた

福井県越前市の万葉の里・恋のうた募集実行委員会が主催する短歌大会である。二〇二二年で第二十四回を数える。応募資格は「高校生以上」であり、特に高校生の部門と一般の部門と

を分けていない。そのため、授業者と学習者が同じレギュレーションで戦える面白さがある。

手間を惜しむための手間を惜しまない

人工知能(AI)の研究者であるカリスこと韓昌熙は、あるテレビ番組の対談(*2)の中で、受験勉強における心構えを「手間を惜しむための手間を惜しまない」という印象的なフレーズで語っていた。稿者自身はそれを聞いたとき、綺麗に対句を成した表現で、しかも内容も含蓄のある箴言だと感心した。その箴言が示すように、本当に必要なところにしっかりと手間暇をかけられるようにするために、それ以外の手間を省き、効率良く物事を進めることが大切である。

学校の先生は、とにかく手間を惜しまない人が多いと感じる。しかし、その手間を少しでも簡略化すれば、授業者自身の心や頭の容量に余裕を生み、次のコンクール応募や創作の授業実践へと踏み出す活力を生み出すのではないかと、稿者自身は考えている。

誤解のないように補足しておく、何も全てをWEB応募に一元化することを提案しているのではない。学習者が応募用紙に自筆で丁寧な書くという活動自体も、教育的意義のあることだと感じているからだ。実際に、稿者自身も二〇二二年度に生徒に応募させた七つのコンクールのうち、WEB応募を行った大会は二つと、

その数は全体の三分の一に満たない。しかし、その二つだけでもWEB応募のコンクールがあるだけで、心理的負担は大きく違う。「コンクール応募をもっとしたいが、時間的にも心理的にも余裕がない」という現場の先生方には、「まずWEB応募より始めよ」と提言したい。WEB応募というこのささやかな「ライフハック」の提案が、一人でも多くの先生のコンクール応募や授業実践の一助になればと願うばかりである。

注

*1 「超然文学賞」に関しては、WEB応募ではなく、書類送付による応募である。応募部門に関しては、「短歌部門」と「小説部門」とがある。詳しくは金沢大学のHPを参照のこと。

*2 毎日放送制作「日曜日の初耳学」(二〇二二年六月二十日放送)。予備校講師である林修との対談。